

その次第を略述いたしますと、御承知のように、わが國では古くは主として朝鮮半島にあつた三韓—馬韓、弁韓、辰韓—との間に交通關係がありました。これは主として海流の關係によるもので、今日でも朝鮮の西海岸から九州に流れる潮流がありますが、古い時代からこの潮流に乗つて、日本と三韓との間に交通ができればはじめたものと思われまゝ。その後、朝鮮では高麗、新羅、百濟が三韓に代り、この三國が日本と盛んに交通するようになり、遂には政治的關係をもつようになりました。即ち、日本の記録によりますと、神功皇后の征韓というような重大事件も起つています。然し、こういう事件については朝鮮の記録には判然とした記事は見えず、どの時代にどの程度の交渉があつたかは、どうもはつきりいたしません。それにしても、日本と朝鮮との間に、或る程度の交渉關係が起つていたことは争われないところであります。

當時の朝鮮の状態を見ますと、西洋紀元前一世紀から一世紀にかけて、支那の漢が—これは前漢であります—朝鮮の北部の地域を支配して、樂浪等の四郡をおきました。樂浪は今日の平壤一帯の地域で、この樂浪を中心として、高い文化が半島に及んでいました。その漢民族の文化が、百濟を通じて日本にも波及してきたわけでありまゝ。それで應神天皇より以來、しだいに漢字とか漢學とかの支那の學問が日本にも傳わり、既に飛鳥時代を俟たないで、佛教なり、それにとりまなう佛教美術工藝、その他いろいろな文化の發達を誘致したのであります。然しこの朝鮮を通じて育成されたわが國の文化が、飛躍的に向上發展する契機となつたのは、いわゆる遣隋使の派遣であります。これは推古天皇の十五年（六〇七年）に、小野妹子を隋に使として派遣され、公けに彼我の間に交通を開かれることになつた有名な事件でありまして、これから後は、從來のように朝鮮を媒介としてではなく、直接に